

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成22年度農作物病害虫発生予察情報について

平成22年度農作物病害虫発生予報第8号を発表したので送付します。

平成22年度農作物病害虫発生予報第8号

平成22年10月29日
徳島県

I. 野菜

冬春トマト

疫病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 2.0%, 発病度が 0.1)。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 窒素質肥料を過用すると茎葉が軟弱となり発生しやすくなるので、肥培管理に注意する。

(2) 罹病葉は伝染源になるので、できるだけ早く摘み取って、ハウス外で処分する。

(3) 病原菌は気孔から侵入するので、薬剤散布は気孔の多い葉の裏側を重点的に行なう。特に、下葉には丁寧に散布する。

(4) 病原菌が侵入してからごく短期間で発病するので、発生を認めたら散布間隔を短縮して、集中的に薬剤散布を行なう。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年よりやや少なく(前年並)、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は33.3%で平年(36.8%)並であるが、発病葉率は 0.3%で平年(5.5%)よりやや低い。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。

タバココナジラミ(バイオタイプB, バイオタイプQ)

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が16.7%, 寄生葉率が 1.5%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) コナジラミ類が発生している苗は使用しない。
- (2) 圃場周辺の雑草は増殖源となるので、除草を徹底する。
- (3) 施設開口部(出入り口, 天窓, ハウスサイド)に0.4mm以下の防虫ネットを被覆し, 昇温抑制のため循環扇を設置するとともに, 紫外線カットフィルム(侵入防止), 黄色粘着紙(誘殺), 光反射マルチ(忌避)等の物理的防除法を活用する。
- (4) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分に付着するように丁寧に散布する。
- (5) ネオニコチノイド系剤の一部, 及び合成ピレスロイド系剤に対する感受性が低いことが報告されているバイオタイプQに対しては, ジノテフラン, ニテンピラム, ピリダベン, スピロメシフェン(ミニトマトには適用無し。), デンプン, オレイン酸ナトリウム等の剤が有効であるとされている。
- (6) 薬剤感受性の低下を回避するため, 同一系統の薬剤の連用は避ける。
- (7) 栽培終了後は成虫の施設外への分散を防ぐため, 薬剤防除を行ったうえで株を切断し, 施設を密閉して蒸し込み, 虫を死滅させる。

冬春ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が19.1%, 発病葉率が2.8%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので, 初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は早期に圃場外に持ち出し, 病原菌密度の低下に努める。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統薬剤の連用は避ける。

すすかび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生圃場率が16.7%, 発病葉率が1.2%であり, ほぼ平年(7.3%, 0.5%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 罹病葉は伝染源になるので, できるだけ早く摘み取って, ハウス外で処分する。
- (2) 発生が多くなると防除が困難になるので初期防除に努める。薬液は下葉の葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (3) 耐性菌出現の恐れがあるので, 同一系統薬剤の連用は避ける。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で, 発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では, 発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が3.7%, 寄生葉率が0.1%)。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので, 薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

オンシツコナジラミ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年よりやや多い)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が50.0%、寄生葉率が4.8%であり、ほぼ平年(39.7%、5.2%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が16.7%、寄生葉率が0.7%であり、ほぼ平年(4.1%、0.2%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ミナミキイロアザミウマ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は66.7%、寄生葉率は2.7%で、ほぼ平年(61.1%、10.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

秋冬ダイコン

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は60.0%であり平年(10.5%)より高いが、発生程度指数は1.7でありほぼ平年(0.3)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

アブラナ科野菜共通

黒腐病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月前半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は発生圃場率が10.3%、発病度が0.4)

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除効果が見られなくなるので、発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。

(2) 害虫による食害痕も病原菌の侵入口となるので、害虫の防除も確実にこなす。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が47.8%、寄生株率が11.1%であり、平年(40.1%、7.2%)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が26.1%、10株当たり寄生幼虫及び蛹数が0.1頭であり、ほぼ平年(11.3%、0.1頭)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉裏に生息しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

(2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

モンシロチョウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は52.2%であり平年(25.9%)より高いが、寄生幼虫数は0.6頭でありほぼ平年(0.8頭)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若齢幼虫時の防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が17.4%、寄生株率が1.0%であり、ほぼ平年(8.8%、0.6%)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハスモンヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率が56.5%、寄生株率が8.3%であり、ほぼ平年(48.7%、5.0%)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

秋冬ネギ

さび病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期の発生圃場率は 5.0%, 発病株率は 0.3%)。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では,天気は数日の周期で変わるとされており,発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除効果が見られなくなるので,発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。

(2) 肥切れすると発生が多くなるので,適切な肥培管理に努める。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では,発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では,天気は数日の周期で変わるとされており,発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年よりやや多い),発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では,発生圃場率が11.1%, 50株あたり寄生虫数が 0.1頭であり,ほぼ平年(20.6%, 0.6頭)並であるものの,食害痕が目立つ圃場が散見される。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では,天気は数日の周期で変わるとされており,発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので,発生初期に徹底防除する。

(2) ヨトウコンーSによる交信攪乱効果は設置後3ヶ月程度で低下してくるので,早めに交換する。

ネギハモグリバエ

1) 予報内容

発生量 平年並～やや多く(前年並),発生程度は「中～多」

2) 予報の根拠

(1) 10月後半の巡回調査では,発生圃場率は88.9%,葉の被害度は16.3で,ほぼ平年(81.0%, 13.3)並の発生である。

(2) 10月22日発表の1ヶ月予報では,天気は数日の周期で変わるとされており,発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 被害葉は有力な発生源となるので,圃場周辺に放置せずに,速やかに処分する。

冬レタス

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で,発生程度は「少」

2) 予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率は58.3%であり平年(219.0)より高いが、寄生株率は2.2%でありほぼ平年(0.9%)並の発生である。

(2)10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が2.4%、寄生株率が0.1%)。

(2)10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ハスモンヨトウ

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生圃場率が8.3%、寄生株率が0.2%であり、ほぼ平年(11.4%、0.7%)並の発生である。

(2)10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

冬春ハウレンソウ

べと病

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期も未発生)。

(2)10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

(1)病原菌は被害株についてそのまま越冬し、春になると分生胞子を形成して伝染源となる。春先の発生を抑制するために、薬剤を予防的に散布して再発を防止する。

(2)罹病株を圃場に放置すると、被害植物体内で形成された卵胞子が土中で越冬して、次作の第一次伝染源となるので、発病株は速やかに処分する。

(3)葉が繁茂して軟弱となると被害が多いので、肥培管理に注意する。

アブラムシ類

1)予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2)予報の根拠

(1)10月広範の巡回調査では、発生圃場率は50.0%で平年(18.7%)と比べてやや高いが、発生程度指数は2.8でほぼ平年(0.8)並である。

(2)10月22日発表の1ヶ月予報では、天気は数日の周期で変わるとされており、発生に中立的である。

3)防除上注意すべき事項

(1)多発すると防除が困難となるので初期防除に努める。

冬春イチゴ

うどんこ病

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期は、発生圃場率が 5.2%, 発病葉率が 0.2%)。
- (2) ビニール被覆後は発病好適環境となるため、増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 罹病葉は伝染源になるので、見つけ次第圃場外に持ち出し、病原菌密度の低下に努める。
- (3) 古葉を早めに除去し、葉裏に薬液が十分かかるように丁寧に散布する。
- (4) 耐性菌出現の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

炭そ病

1) 予報内容

発生量 平年よりやや多く(前年よりやや多い)で、発生程度は「多」

2) 予報の根拠

- (1) 10月の巡回調査では、発生を認めていない(平年同時期の発生圃場率は前半が 9.1%, 後半が12.4%)。
- (2) 10月下旬に実施した炭疽病簡易検定では、約2割の株が潜在感染している。
- (3) ビニール被覆後は発病好適環境となるため、発生が増加するものと予想される。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 発生が多くなってからでは防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2) 従来型炭そ病の場合は、萎凋症状が止まっているようでも、ビニール被覆後に枯死することが多いので、罹病葉は見つけ次第除去し、苗があれば植えかえる。
- (3) 葉枯性炭そ病の場合は、早目に病葉を除去し、アミスター20フロアブル等、効果が高い薬剤で集中的に防除を行なう。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は46.2%, 寄生株率は 7.4%であり、ほぼ平年(31.6%, 5.4%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、薬液は葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。

ハダニ類

1) 予報内容

発生量 平年並(前年並～やや少ない)で、発生程度は「少」

2) 予報の根拠

- (1) 10月後半の巡回調査では、発生圃場率は30.0%, 寄生葉率は 2.5%であり、平年(21.5%, 2.1%)並の発生である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は葉裏に寄生しているので、薬液が葉裏にも充分付着するように丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので、同一系統薬剤の連用は避ける。

